

[A年] 棕櫚の主日(2025年4月13日)**【旧約聖書日課】哀歌 5章15～22節**

- 15 わたしたちの心は楽しむことを忘れ
踊りは喪の嘆きが変わった。
- 16 冠は頭から落ちた。
いかに災いなことか。
わたしたちは罪を犯したのだ。
- 17 それゆえ、心は病み
この有様に目はかすんでゆく。
- 18 シオンの山は荒れ果て、狐がそこを行く。
- 19 主よ、あなたはとこしえにいまし
代々に続く御座にいます方。
- 20 なぜ、いつまでもわたしたちを忘れ
果てしなく見捨てておかれるのですか。
- 21 主よ、御もとに立ち帰らせてください
わたしたちは立ち帰ります。
わたしたちの日々を新しくして
昔のようにしてください。
- 22 あなたは激しく憤り
わたしたちをまったく見捨てられました。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 1章18～25節

- 18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。19 それは、こう書いてあるからです。
「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、
賢い者の賢さを意味のないものにする。」
- 20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

【福音書日課】 マタイによる福音書 27章32～56節

32 兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。33 そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、34 苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。35 彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、36 そこに座って見張りをしていた。37 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。38 折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。39 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、40 言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」41 同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。42 「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。43 神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」44 一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47 そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。48 そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。49 ほかの人は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。50 しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。51 そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、52 墓が開いて、眠りにについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。53 そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。54 百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。55 またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。56 その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼバダイの子らの母がいた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

哀歌5章15～22節

- 15 私たちの心から喜びは消え
踊りは喪の嘆きに変わった。
- 16 冠は私たちの頭から落ちた。
何という災いだ。
私たちは罪を犯したのだ。
- 17 そのために私たちの心は痛み
このために目は暗くなった。
- 18 荒れ果てたシオンの山を
ジャッカルがうろついている。
- 19 主よ、あなたこそ、とこしえに座する方。
あなたの御座は代々に続きます。
- 20 なぜ、いつまでも私たちを思い出さず
これほど長く捨てておかれるのですか。
- 21 主よ、私たちを御もとに立ち帰らせてください。
私たちは立ち帰りたいたいです。
- 私たちの日々を新しくし
昔のようにしてください。
- 22 それとも、あなたは私たちをどこまでも退け
激しい怒りのうちにられるのでしょうか。

コリントの信徒への手紙一1章18～25節

- 18 十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなもの
ですが、私たち救われる者には神の力です。19それは、
こう書いてあるからです。
「私は知恵ある者の知恵を滅ぼし、
悟りのある者〔別訳→賢者〕の悟りを退ける。」
- 20 知恵のある者はどこにいる。学者はどこにいる。
この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かな
ものにされたではありませんか。21世は神の知
恵を示されていながら〔直訳→神の知恵の内にあ
って〕、知恵によって神を認めるには至らなかった
ので、神は、宣教という愚かな手段〔直訳→宣
教の愚かさ〕によって信じる者を救おうと、お考
えになりました。22ユダヤ人はしるしを求め、ギリ
シア人は知恵を探しますが、23私たちは、十字架に
つけられたキリストを宣べ伝えます。すなわち、
ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かな
ものですが、24ユダヤ人であろうがギリシア人
であろうが、召された者には、神の力、神の知恵
であるキリストを宣べ伝えているのです。25なぜ
なら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人
よりも強いからです。

マタイによる福音書27章32～56節

32兵士たちは出て行くと、シモンという名前の
キレネ人に出会ったので、この人を徴用し、イエ
スの十字架を担がせた。33そして、ゴルゴタとい
う所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、34胆
汁〔別訳→苦いもの〕を混ぜたぶどう酒を飲ませ
ようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうと
されなかった。35彼らはイエスを十字架につける
と、くじを引いてその衣を分け合い、36そこに座っ
て見張りをしていた。37イエスの頭の上には、「こ
れはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書
きを掲げた。38同時に、イエスと一緒に二人の強盗
が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけら
れた。39そこを通りかかった人々は、頭を振りなが
らイエスを罵って、40言った。「神殿を壊し、三日
で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そ
して十字架から降りて来い。」41同じように、祭司
長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエ
スを侮辱して言った。42「他人は救ったのに、自分
は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架か
ら降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。43彼
は神に頼ってきた。お望みならば、神が今、救っ
てくださるように。『私は神の子だ』と言ってい
たのだから。」44一緒に十字架につけられた強盗た
ちも、同じようにイエスを罵った。

45さて、昼の十二時から全地は暗くなり、三時に
及んだ。46三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エ
リ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが
神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」
という意味である。47そこに立っていた何人かが、
これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」
と言った。48するとすぐ、そのうちの一人が走り寄
り、海綿を取って酢〔ワインビネガー〕を含ませ、
葦の棒に付けて、イエスに飲ませた。49ほかの人々
は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、
見てみよう」と言った。50しかし、イエスは再び大
声で叫び、息を引き取られた。51その時、神殿の垂
れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こ
り、岩が裂け、52墓が開いて、眠りに就いていた多
くの聖なる者たちの体が生き返った。53そして、イ
エスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、
多くの人に現れた。54百人隊長と一緒にイエス
の見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの
出来事を見て、非常に恐れ、「まことに、この人
は神の子だった」と言った。55またそこでは、大勢
の女たちが遠くから見守っていた。イエスに仕え
てガリラヤから従って来た女たちであった。56そ
の中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの
母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・4月13日「棕櫚の主日」の日課主題は「十字架への道」。教団の主日聖書日課は、通常の三つの聖書日課のほかに、「棕櫚の主日」に行われてきた「入堂行列」（礼拝前に会堂・聖堂の外に集合し、エルサレム入城に関する御言葉を朗読し、棕櫚の枝を振りながら会堂・聖堂周辺を一蹴した後に礼拝堂に入堂する）のための聖書日課を定めている。

・入堂行進の旧約日課はゼカリヤ書 9:9~10（毎年固定）、福音書日課はマタイ 21:1~11 が定められている。
 ・旧約日課は、哀歌から、「第五の歌」の後半部。使徒書日課は、コリントの信徒への手紙一から、書簡の初めにパウロの宣べ伝えてきたことの要諦を示そうとする箇所。福音書日課は、マタイによる福音書から、裁判を終えた主イエスが十字架につけられ、息を引き取られるまでの様子を伝える箇所。

旧約日課(哀歌 5章より)

・「哀歌」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）「諸書」の中で「五つの巻物（ハメシュ・メギロ）」に区分される詩歌文書。ユダヤ教共同体で「五つの巻物」として区分される五つの文書（雅歌、ルツ記、哀歌、コヘレトの言葉、エステル記）は、それぞれ、五つの祭り（過越祭、七週祭、ティシャ・ベアブ、仮庵祭、プリム祭）に際して朗読される文書として位置づけられてきた。「哀歌」を朗読する「ティシャ・ベアブ」は、ユダヤ暦「アブの月の九日」にエルサレム神殿の破壊を記念して断食する祭り。エルサレム神殿の破壊は、前 586 年、バビロニア軍によるエルサレム攻城戦に伴う出来事。「哀歌」は、このエルサレム陥落と神殿喪失を嘆く歌として、伝承では預言者エレミヤによって、作られたとされる。

・「哀歌」は、五つの詩歌から構成されており、「第一の歌」から「第四の歌」まではそれぞれ、「アルファベット詩」の様式で書かれている。アルファベット詩は、ヘブライ語アルファベット 22 字を順に文頭にした 22 節で構成された詩で、「詩編」にも見られる（詩 119、145 など）。ただし、「第三の歌」（3 章）は、各アルファベット字が三節の繰り返しで構成されている。これらに対して、「第五の歌」は、アルファベット詩の様式を取っておらず、他の詩とは異なる成り立ちが推認される。ただし、「第五の歌」も、アルファベット詩と同様の 22 節で構成されている。日課箇所は、「第五の歌」の三分の一に相当する末尾。

・日課箇所を含む「第五の歌」には、他の歌には見られない「エジプト」や「アッシリア」への言及があるなど、背景の違いが推察される。預言者エレミヤが最初に仕えたヨシヤ王（在位＝前 640～609 年頃）が即位した頃、南王国ユダはアッシリアおよび同盟国エジプトに従属することで恩恵を受けていた。ヨシヤ王は、新興覇権国バビロニアとの同盟に舵を切ったが、ヨシヤ

王の戦死後、南王国宮廷は、親バビロニア派と親エジプト派（アッシリアは前 609 年に滅亡している）の間で主導権争いが激しくなり、親バビロニア派の多くが「第一次バビロン捕囚」（前 598 年頃）でバビロンに移住する一方で、エルサレム宮廷は親エジプト派が主流となり、反バビロニア政策に傾倒。結果として、王国の滅亡を招くことになった。エレミヤらは、ヨシヤ王のもとで宮廷に入り親バビロニア派であったが、最後までエルサレムに残り、最終的には親エジプト派らと共にエジプトに亡命した（エレ 43～44 章など）。

使徒書日課（Ⅰコリント 1 章より）

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。「手紙二」と共に、パウロがローマ教会共同体メンバーと共に創設に携わったコリント教会共同体に宛てて記された書簡。パウロは、コリント宣教の後、活動拠点をエフェソに移しているが、マケドニアの諸教会（フィリピやテサロニケ）など自身が創設に関わった教会に対しては、おもに書簡のやり取りや協力者の派遣を通して、助言をし続けていた。マケドニアの諸教会が小さな共同体ながらパウロと親密な信頼関係を続けていたのに対して、コリントの教会とパウロの関係は、紆余曲折があったと推認される。コリント教会は、創設当初からパウロのほかに、ローマ教会共同体の指導者ペトロ（ケファ）や、エジプト・アレクサンドリアの教会共同体から派遣されている宣教者アポロなどが指導に関わっており、パウロに対する信頼は必ずしも篤くなかった。そのような関係性の中で、コリント教会共同体における不和の実情を支持者から伝え聞いたパウロは、正面きって教会の問題性を指摘し、正論をもって助言しようと試みている。実際には、「手紙一」の試みは成功せず、両者の関係性が悪化したが、最終的に「手紙二」でパウロが和解の意志を示すことで関係を回復したと推認される。

・日課箇所は、前段で教会内の分派騒ぎがあるとの伝聞を取り上げて問題を指摘したことを受けて記されている。パウロは、分派騒ぎを彼らの知恵や知識を巡る優劣論争とみなし、自分たちが真に立つべき「神の知恵」としての「十字架の言葉」に拠って立つべきことを説こうとしている。この「十字架の言葉」と称される事柄は、パウロがキリストについて理解している宣教内容のことを指していると考えられるが、ここでは端的に「神の愚かさ」や「神の弱さ」で表現される逆説的救済観が示唆されるのみである。

・「知恵ある者」はギリシア語「ソフォス」、「知恵」は「ソフィア」。パウロは「知恵ある者（ソフォス）」を「書簡集」全体で 16 回用いているが、その内 11 例が本書簡での用例。また「知恵（ソフィア）」は 28 用例中 17 例が本書簡。コリントは、「ソフィスト」の伝統のあるアテネから直線で 80 キロほどの距離にある都市だが、コリント地峡を挟んでペロポネソス半島に位置し、古典古代ギリシアの都市国家（ポリス）時代には、アテネと覇権を争う関係にもあった。

福音書日課(マタイ 27 章より)

・日課箇所は、主イエスの磔刑(十字架刑)の執行を伝える伝承説話で、四福音書が共通して伝えているが、特に共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)は共通の伝承説話を採用していると考えられる。この処刑に際して、磔刑に用いられる十字架を担いだ者について、共観福音書は「キレネ人シモン」の名を挙げて伝えるが、ヨハネ福音書は最後まで主イエス自身であったと伝えている。ここには、共観福音書とヨハネ福音書の「キレネ人シモン」個人に対する評価の違いがあるのかもしれないが、ヨハネ福音書には一貫して主イエスの主体的行動を強調する傾向があり、判断は困難。

・主イエスの死に際する描写で、マタイとマルコは共通して、百人隊長の「本当に、この人は神の子だった」という発言を伝えているが、ルカは「本当に、この人は正しい人だった」としている。マタイは、この発言と対比させるように、十字架につけられた主イエスを罵る人々の発言の中に「神の子なら、自分を救ってみろ」という言葉を加えている(43 節も参照)。

来週の誕生日 (4 月 13 日~19 日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-307「ダビデの子、ホサナ」は、スウェーデン語聖書のマタイ 21:9 の聖句に、18 世紀末スウェーデン国王の招きで活動したドイツ人音楽家フォクラーが作曲。スウェーデンおよびフィンランドの福音ルーテル教会讚美歌集で 1 番に収められた待降節第 1 主日用の讚美歌。フィンランド語版からこども讚美歌に採用され、棕櫚の主日の聖句であることに即して受難節ことに棕櫚の主日用の讚美歌として採用。

・21-309「あがないの主に」(= I 129 番「あがないぬしに」を改訳)の歌詞は、マタイ 21:6~11 に基づく古いラテン語聖歌で、多くの旋律で歌われてきた(21-308 番は同じラテン語原詞の別訳)。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家テシュナーが別のドイツ語讚美歌のために作曲したもの。

・21-311「血しおしたたる」(= I 136)は、12 世紀フランスの神秘思想家クレルヴォーのベルナルドゥスの弟子であるシトー会修道士アルヌルフ・フォン・レーヴェンのラテン詩に基づいて、17 世紀ドイツを代表する讚美歌作家 P. ゲルハルトが作詞。曲は、ルター派の作曲家ハンス・レオ・ハスラーが恋愛歌「わが心は千々に乱れ」として作曲した旋律で、1613 年出版のコラール集「聖なる調和」に「心より憧れ望む」の曲として採用されていたものが、1656 年出版の讚美歌集「歌による敬虔の訓練」でゲルハルトの歌詞と結びつけられた。原曲は 310 番のリズムだったが、「血しおしたたる」と結びつけられるまでに 311 番のリズムに改変された。バッハの「マタイ受難曲」等で使用されている。

・21-306「あなたもそこにいたのか」(= II 177)は、代表的なアフロ・アメリカン霊歌の一つで、歌詞および曲には多数の版が知られている。最初の出版は、19 世紀末、ウィリアム・E・バートンの編じた讚美歌集。

21-307「ダビデの子、ホサナ」

Hoosianna, Daavidin Poika

21-309「あがないの主に」

Gloria, Laus, Et Honor

21-311「血しおしたたる」

O Haupt voll Blut und Wunden

1. O Haupt voll Blut und Wunden, / voll Schmerz und voller Hohn, / o Haupt, zum Spott gebunden / mit einer Dornenkron, o Haupt, / sonst schön gezieret / mit höchster Ehr und Zier, / jetzt aber hoch schimpfieret: / begrüßet seist du mir!
2. Du edles Angesichte, / davor sonst schrickt / und scheut das große Weltgewichte: / wie bist du so bespeit, / wie bist du so erbleicht! / Wer hat dein Augenlicht, / dem sonst kein Licht nicht gleichet, / so schändlich zugericht?
3. Nun, was du, Herr, erduldet, / ist alles meine Last; / ich hab es selbst verschuldet, / was du getragen hast. / Schau her, hier steh ich Armer, / der Zorn verdient hat. / Gib mir, o mein Erbarmen, / den Anblick deiner Gnad.
4. Erkenne mich, mein Hüter, / mein Hirte, nimm mich an. / Von dir, Quell aller Güter, / ist mir viel Guts getan; / dein Mund hat mich gelabet / mit Milch und süßer Kost, / dein Geist hat mich begabet / mit mancher Himmelslust.
5. Ich will hier bei dir stehen, / verachte mich doch nicht; / von dir will ich nicht gehen, / wenn dir dein Herze bricht; / wenn dein Haupt wird erblassen / im letzten Todesstoß, / alsdann will ich dich fassen / in meinem Arm und Schoß.
6. Es dient zu meinen Freuden / und tut mir herzlich wohl, / wenn ich in deinem Leiden, / mein Heil, mich finden soll. / Ach möcht ich, o mein Leben, / an deinem Kreuze hier / mein Leben von mir geben, / wie wohl geschähe mir!
7. Ich danke dir von Herzen, / o Jesu, liebster Freund, / für deines Todes Schmerzen, / da du's so gut gemeint. / Ach gib, dass ich mich halte / zu dir und deiner Treu / und, wenn ich einst erkalte, / in dir mein Ende sei.
8. Wenn ich einmal soll scheiden, / so scheid nicht von mir, / wenn ich den Tod soll leiden, / so tritt du dann herfür; / wenn mir am allerbängsten / wird um das Herze sein, / so reiß mich aus den Ängsten / kraft deiner Angst und Pein.
9. Erscheine mir zum Schilde, / zum Trost in meinem Tod, / und lass mich sehn dein Bilde / in deiner Kreuzesnot. / Da will ich nach dir blicken, / da will ich glaubensvoll / dich fest an mein Herz drücken. / Wer so stirbt, der stirbt wohl.

21-306「あなたもそこにいたのか」

Were You There

1. Were you there when they crucified my Lord?
Were you there when they crucified my Lord?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when they crucified my Lord?
2. Were you there when they nailed him to the tree?
Were you there when they nailed him to the tree?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when they nailed him to the tree?
3. Were you there when they laid him in the tomb?
Were you there when they laid him in the tomb?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when they laid him in the tomb?
4. Were you there when God raised him from the tomb?
Were you there when God raised him from the tomb?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when God raised him from the tomb?